

平成17年3月2日
農林水産省生産局

食料・農業・農村政策審議会 生産分科会 第11回畜産企画部会の概要について

1. 日時 平成17年3月1日(火) 13:30~16:05
2. 場所 東京都千代田区九段南2-1-5 三番町分庁舎
3. 出席者
委員等：[別紙のとおり](#) [PDF]
事務局：畜産部長、畜産企画課長、畜産振興課長、牛乳乳製品課長、食肉鶏卵課長、消費・安全局衛生管理課長 ほか
4. 意見交換
事務局より、「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針(案)」及び「家畜及び鶏改良増殖目標(案)」に関する説明が行われた後、意見交換が行われ、委員からの主な発言は、以下のとおり。

【国際化の進展に対応し得る産業構造の確立】

現在飼料生産を担っているのは50代が主体であり、今後10年を考えた場合、コントラクターの整備はますます重要。また、コントラクターの立ち上げ、推進には専門的な知識を有するコーディネーター的な人材が必要である。

「飼い直し」は広く一般に用いられている言葉ではないので、「いわゆる飼い直し」という表現にすべきではないか。

人材の育成・確保のポイントの記述について、「女性が活躍しやすい環境整備」のためには、「家族経営協定の締結促進による女性の認定農業者の拡大」だけではないので、もう少し書き込むべき。

【畜産における食育の推進】

国民一人一人が自らの「食」について考える習慣を身につけ、生涯を通じて健全で安心な食生活を実現することが大切であり、理解したことをどう行動に結びつけていくかが食育のポイントであることからすれば、「理解増進」という言葉の多用は、理解することだけが目的であるかのような印象を受ける。

【流通飼料の安定的な供給】

濃厚飼料の自給率を上げていくため、食品製造副産物等の未利用資源の活用に向け、食品工場と連携して思い切ったことをやっていく必要があるのではないか。

【家畜改良の推進】

北海道は今後ますます後継牛供給基地としての機能が高まることを踏まえれば、平均的に能力を向上させるだけでなく、改良素材としての利用の観点から産乳性や

体型等のバラツキを考慮することも必要ではないか。

肥育牛の情報は、種雄牛の改良にはもちろん必要であるが、経営改善にも役立つことから繁殖経営までフィードバックする仕組みが重要である。

【需要の長期見通し、生産数量の目標等】

需要の長期見通し及び生産の目標については、関係者の努力を促すためにも、現状値と目標値を併記して示すべき。

【近代的な酪農経営及び肉用牛経営の基本的指標】

放牧やコントラクターについては様々な利用形態があることを踏まえれば、指標において10年後の利用の在り方を示す意味でも注釈等をつけてはどうか。

複合経営については、粗収入や経営費等の内訳を入れられないか。

【集送乳及び乳業の合理化に関する事項】

生乳については、北海道から都府県への移出量が増加していく中で、指定団体の機能の充実、乳業プラントをどう配置するかといった視点が必要。

輸入乳製品は価格の優位性だけでなく、オーガニック製品など品質面から輸入されている製品もあることから、国産乳製品についても品質面の向上を図るべき。

問合せ先

生産局畜産部畜産企画課 松本、歌丸

03-3502-8111（内線3865, 3866）

03-3501-1083（直通）

(別紙)

食料・農業・農村政策審議会生産分科会
第11回畜産企画部会 出席委員名簿

(委員：2名)

生源寺
増田

眞一
淳子

東京大学大学院農学生命科学研究科教授
ジャーナリスト

(臨時委員：9名)

足立
石川
今野
大神田
岸葉
千村
中坂
矢

己幸
郁子
克枝
敏晃
康彦
悦子
祐三
雅充

女子栄養大学教授
食と生活ジャーナリスト
酪農自営業
(社)日本乳業協会副会長
全国消費者団体連絡会事務局長
(財)日本農業研究所研究員
福島大学行政社会学部教授
全国農業協同組合中央会常務理事
東京大学大学院経済学研究科助教授

(専門委員：7名)

阿部
金井
高橋
富樫
番場
福田
向井

亮
俊男
康博
研治
久雄
晋
文雄

日本大学生物資源科学部教授
(財)畜産環境整備機構副理事長
JA岩手ふるさと畜産部畜産酪農課長
(独)農業・生物系特定産業技術研究機構
北海道農業研究センター畜産草地部長
愛知県農業総合試験場畜産研究部長
九州大学大学院農学研究院助教授
神戸大学農学部応用遺伝学教授

(注：各委員の順は五十音順。)

(敬称略)